エコライフと宗教と教育に関する関係性の研究

研究代表　浅沼　茂
共同研究者　　加賀美雅弘　　原子栄一郎

本研究は、米国と欧州において近代文明に距離をおくアーミッシュのような宗教的な倫理が現代文明に反省を迫る中、その生活のエートスが、人間として生き方の優しさ、他者への寛容さとして優れた道徳的な価値をもっていることを明らかにすることをめざす。このような倫理的な価値観こそが、環境教育の中心的な位置にあり、生活実践自体への反省の重要性を示していた。新時代を迎えたこのようなアナバプティストたちの生き方は、家庭を含む教育のあり方にどのような影響を与えているのかを探究する。それは、宗教的な倫理的価値と結びついて、世俗との境界線をより緩い形で倫理的価値をより実践可能にものとしたメノナイトとオールド・オーダー・アーミッシュの思想と教育を一つの研究対象として取り上げ、思想と生活実践がどのように結びついてきたのかを探究する。

米国でのフィールド調査では、ウィスコンシン州マジソン近郊にあるオールドオーダー・アーミッシュの村の学校を訪問し、子どもたちの生活をつぶさに観察した。また、アーミッシュと近い、あるいは時にアーミッシュと同類とされるメノナイト派出身の学者である、ジョン・マイヤー（スタンフォード大学名誉教授）に面接調査をおこなった。いずれも、2013 年度では 2 回にわたって訪問調査をした。また、山形県の小国峠にあるキリスト教育独立学園を訪問し、子どもたちの学校生活を観察調査した。

本研究ではより原理的にエコロジカルな生活を実践している、アーミッシュの子どもたちにおいても、その生活態度がどのように教育実践として展開されてきたのかを明らかにする。本研究は、欧州のプロテスタンティズムに起源をもつアーミッシュの人たちの生活基盤が環境に優しいものとなって、未来において一つの生活モデルを示していることを明らかにする。オールドオーダー・アーミッシュとメノナイト派は、その禁欲的な精神から自己の生活態度を形成し、有機農法や自然的な生活を送り、近代文明を拒否する生活習慣を送っている。彼らの生活態度は、すべて合理化され、便利となった生活の中で生きている現代の子どもの教育のあり方に反省を促し、その教育可能性を秘めている。それは、マイノリティとして多文化教育的な関心から差別の問題としてとらえられがちであった。しかし、現代文明に浸り、その現実的な結果について無自覚な現代人にとっては、その価値を十分認識しえないでいる。

それに対して、アーミッシュの生き方は、宗教的な倫理が個々人の生活態度を形成し、現代文明に反省を迫る中、そのエコロジカルな生活が将来の地球にとって優しい生き方をモデルとして提示している。

サラ・フィッシャーとレイチェル・ストールの『アーミッシュの学校』では、アーミッシュのライフスタイルの特徴を次のようにまとめている。「１）信仰に基づいた簡素が生活

をモットー都市、2）教区と呼ばれる数十家族からなる相互扶助のコミュニティを形成し、3）農業を基礎とした生活、4）家族中心の生活を行い、5」電気や電話を使わず、6）自動車を所有せず、馬車（バギー）を利用し、7）独特の衣服を装い、8）八年生の学校を設立、雲煙詩、9）ペンシルバニア・ダッチ（言語）を話し、10)二週間に一度各家庭、持ち回りで教会活動をおこなう」（サラ・フィッシャー/レイチェル・ストール『アーミッシュの学校』（論創社、杉原利治・大藪千穂訳、2004 年、145 頁）と記されている。この特徴づけは、簡潔で明確にアーミッシュのエコライフの特徴を表している。

この生活のエートスは、単に過去の遺産の博物館的な価値を示しているばかりではない。それは、人間として生き方の優しさ、他者への寛容さとして優れた道徳的な価値をもっていることを示してきた。このことは、実際のアーミッシュの人たちの生活と子どもたちへの教育の現状を見ると明らかである。子どもたちは、農業を中心とする生活の中で、家庭の労働を手伝い、実際の労働を手伝いながら、その技術を学び、また、禁欲的な生活態度の中で生きている。

マックス・ヴェーバーによればこの禁欲的な精神こそが、プロテスタンティズムのエートスとなって資本主義につながる営利的精神の元になったものとして分析されている。禁欲的な精神がどのようにして営利的な精神に変化していったのかということを解明していったのが、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』であった。

アーミッシュに近い、メノナイトについては、ドイツにおいてはその現世的な価値を認められていたことが記されている。「プロテスタント諸派のうちでもとくに「非現世的なこととともに諺のようになっている信団（ゼクテ）、わけてもクウェイカーとメノナイトの場合に、宗教的な生活規制が事業精神の高度な発達と結合しているということだ。イギリスや北アメリカでクウェイカーが演じた役割は、オランダやドイツではメノナイトが演じた。このことは幾多の周知の事実によって明らかだが、とくに東プロイセンでメノナイトが兵役に服することを絶対に拒否したにもかかわらず、フリードリッヒ・ヴィルヘルム一世さえ産業の不可欠な担い手だとしてそれを放任したという事実は、この国王の性格に照らして考えるとき、もっとも有力な例証の一つだと言わねばならない」（マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波文庫、1989 年、32 頁）。このような敬虔な信仰が、「事業精神」へと変質する過程についてヴェーバーは特に追究し、そのエトスへの変質を明らかにしたのである。

しかし、その敬虔な精神が、近代資本主義への精神へと変質しない場合、どのような行き方を現代人の前に突きつけることになるのか、アーミッシュは、まさにその生き方をかけてそれを提示しているのである。資本主義の精神においては、永遠の命の保証を得るための証として、果実である利益を追求する近代的な資本主義家が登場する。彼らは、享楽を追求するための資本家ではなく、自らの禁欲的な生活の見返りとして救いを求めていた。この救いの追求こそが、近代資本家が本来持っていた生活態度の姿であった。アーミッシュたちの生き方は、この原初的な生き方をそのまま保持し、生きた博物館として現代のア

メリカにおいて生きているのである。彼らの有機農法や文明に背を向けた生活は、その信仰をおいては理解できないものである。

彼らが他者に対して用心深いのは、自らの集団を区別し、その倫理的な凝集性を高めるためでもある。それは自分たちの共同体を守るための必要な集団的特性である。他方、この共同体の子どもたちは、文明を拒否するために、自分たちとは異なる文化材に対しては敏感に興味関心をもって反応する。それは、彼らの可塑性と可能性を示している。たとえば、折り鶴やぴょんぴょんカエルのような折り紙を見せると非常な驚きを持って興味を示す。このような異文化に対する関心は、文明化した現代人の生活とは異なり、新しいものが現れた時への興味関心と好奇心によって、新たな探究をはじめるその学習態度につながっている。このような生活態度の教育的な意義が現代も機能しているという現実は、それが人間の生き方に一つの指針を与えるものとなっている。このような倫理的な価値観こそが、環境教育の中心的な位置にあり、中立的な技術の教育ではなく、生活実践自体への反省の重要性を示していた。

欧州で迫害を受けてきたアーミッシュの生き方は、今や、ドイツやフランスの環境教育の手本とさえなっている。新時代を迎えたこのようなアナバプティストたちの生き方は、家庭を含む教育のあり方にどのような影響を与えているのであろうか、それは、山形県の山奥にあるキリスト教独立学園のような農業とキリスト教育を中心とするような学園での実践に共通するものである。それは、単に子どもたちの集団への帰属を強制するものではなく、子どもたちが自立した人格として主観的な人間として生きる生活態度を示している。それは、宗教的な倫理的価値と結びついて、世俗との境界線をより緩い形で倫理的価値をより実践可能にものとしたアーミッシュやメノナイトの思想における教育においては、その理想型を示している。他方、この生活態度は、エコロジカルな生活実践であり、アーミッシュの子どもたちにおいて、自然的事物への好奇心、そして、新しい事物への好奇心を熟成させることにつながっている。このような態度は、現代文明の物的な非人間性と対極にある自然環境の豊かさと結びついており、このような環境こそが豊かな人間性につながっているといえる。

このような信仰と生活実践の問題は、マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の中で、信仰と近代的な資本主義の営利精神という一見相容れない生活実践が、因果関係的に説明できるものとして周知の理論となって世に問われることとなった。ジョン・マイヤーが述べているように、プロテスタントであれば自動的に資本家になるというような単純な因果関係で近代的な資本主義者を説明できるものではない。そこには、エートスという倫理的な雰囲気が触媒として介在することが不可決のステップである。しかし、このような触媒の存在自体には、教会の外にある教育という重要な世俗的活動が作用している。この教育活動自体は、近代の学校制度の中でどのように作用してきたのであろうか。

サラ・フィッシャーは、アーミッシュの学校について非常に丁寧な紹介をしている。そ

れは、第 2 次大戦後、米国において義務教育が 9 年制に延長されるに伴って発生したことが事の発端になっている。ウィスコンシン州のヨーダー・ケースとして知られるアーミッシュの学校を州が認めるか否かという裁判のケースは、政教分離の原則を巡って米国では大きな焦点となった。義務教育が 8 年制であったときは、問題にならなかったものが、9 年制になると問題となったのはなぜなのだろうか。それは、9 年生目がアーミッシュの村の労働力の問題として重要な危機につながるからである。

アーミッシュの村の子どもたちの生活を見てもわかるように、子どもたちは、学校から家に帰るとファミコンでゲームをしたりしている訳ではない。すぐに家の手伝いが待っている。バケツに卵をいっぱい入れて運ぶ子ども、畑を馬具で耕すのを手伝う子どもなど、アーミッシュの村では、子どもは重要な労働力なのである。この労働力としての子どもたちの生活のあり方をどのように考えるかが、アーミッシュの生活の価値の評価として重要な位置にある。子どもたちは、アーミッシュの学校においては、近代学校と同じような学習をしている。リーディング、スペリング、実用数学、地理、歴史、読み物としては、『ハイジ』、『若草物語』、『草原の小さな家』などが読まれている。これらの教材は、古く、現代の生活とはややかけ離れたものである。道徳的には健全なもの、神について教えていないものに限られる。学校では、神聖な神のことについては教えられないものという、一種の政教分離がアーミッシュの学校では生きている。

授業はほとんど英語でなされ、金曜日の時間だけがドイツ語を学んでいる。音楽は、15 分くらい、賛美歌を歌うことが多い。また、雪の中でも鬼ごっこのような遊びをしている。雪が深い時は、教室の中で鉄製の机の間を縫って、フルーツバスケットなどで遊んだりしている。理科のようなものであろうか、料理用の調味料などを使い、何か実験のようなこともしている。野球も子どもたちが遊び時間にやったりする。

学校生活は、公立学校とは多くの点で大きな違いはないものの、プロジェクト学習のようなものはないようだ。クリスマス会は、地域によってあったりなかったりするようである。フィッシャーによるとクリスマス会が催される地域では学校での会は、日本の文化祭のように村全体の催し物としてお祭りのようになるという。歌や寸劇、詩を一生懸命朗読したりするという。

このような人間的で情緒的な感動は、現代の学校生活において非常に小さな位置に追いやられ、その重要な価値の存在については忘れさられているものである。はかなくも、物質文明の飽くなき追求は、人間的な幸福をどのように実現するのかというような価値の問題からは、現代人をして遠ざける結果をもたらしてきた。このことは、再度、宗教的な信仰の価値、情緒合理性の価値を現代の学校においてどのように政教分離の原則を曲げることなく、実現できるのかということを問うているのである。